

要旨

黒田総裁就任直後に行われた「質的量的金融緩和」は、国債価格の乱高下をもたらし、市場の流動性を悪化させた。中央銀行による国債買入れ政策は市場の流動性を悪化させるものなのか？悪化させないための条件は何か？本論では、日銀がその後行った買入れ政策の変化が市場の流動性にどのような影響を与えたのかを分析する。その結果、（１）買入れ頻度の増加、（２）１回当たりの買入れ額の減少、（３）買入れ額のばらつきの減少といった買入れ策の変更が市場流動性の改善に大きく寄与していることが明らかになった。これらの政策変化は投資家に対して買入れスケジュール予想を容易にし、サプライズを減らすことにつながっている。日銀の政策変化とそれがもたらす市場流動性への影響は、金融当局の情報伝達と市場の質に関する理論を支持する証左であることを示す。

¹ iwatsubo@econ.kobe-u.ac.jp